岸井さんのメッセージと終盤国会

ジャーナリストの岸井成格さんが亡くなった。日曜日の朝、サンデーモーニングで、岸井さんの鋭く、温かいコメントを聞くのが楽しみだった。もう、それはできない。

20 日のサンデーモーニング「風をよむ」のコーナーは、岸井さん追悼を特集した。慌ててカメラを取ってきて、岸井さんの姿を何枚か写した。若き日の岸井さん、番組でコメントする岸井さん。「しっかりした座標軸をもって 的確な分析 判断 わかりやすく解説する」「下手をすると権力の腐敗というのが始まっているのではないかという危機感」などと。

番組司会を務める関口宏さんのコメント(朝日新聞ほか)。「最後に会ったのは、春ちょっと前だったかな。‥‥ そのときに『何か言いたいことない』って聞いたらね、一生懸命、彼は声に出そうとして、『たるんじゃったな、みんな』って言ったのを覚えています。あれが最後に聞いた彼の言葉だった。残念です」と。

岸井さんの「たるんじゃったな、みんな」という言葉が、こころに響いてくる。私たち一人ひとりに向けられている言葉ではないだろうか。

なかでも政治とメディアは「たるんじゃって」いる。やりたい放題の安倍政権、それを「応援」する一部の大手マスコミ。とりわけ終盤国会についての岸井さんのコメントが聞きたかった。ここでは朝日新聞の 5 月 19 日社説「逃げ切りは許されない」を紹介しておきたい。

国会の会期末まで残り 1 カ月。相次ぐ不祥事の追及から逃げ切りを図り、首相肝いりの法案は数の力で押し通す。終盤国会に臨む安倍政権の戦略が、あからさまになってきた。

森友学園をめぐる財務省の決済文書改ざん問題で、政権・与党はきのう、野党に約束していた改ざん前文書の国会提出を 23 日に先送りした。文書が膨大で、「非公表部分の黒塗りが間に合わない」として、一方的に前言を翻した。

これを受け、安倍首相が出席する予算委員会集中審議は、想定されていた 21 日から、首相がロシア訪問を終えた後の 28 日以降にずれこむことになった、

加計学園の獣医学部新設をめぐる問題でも、野党が求める加計孝太郎理事長や愛媛県の中村時広知事ら関係者の国会招致に応じる姿勢は全くない。

審議日程が限られる中、真相解明の機会を先延ばしする。国民への説明より、責任回避を優先するかのような政権の対応は不誠実というほかない。

政権・与党は一方で、首相が今国会の最重要法案と位置づける働き方改革関連法案やカジノを含む統合型リゾート（IR）の実施法案などを、野党の反対を押し切ってでも今国会で成立させる構えで、審議を加速させている。

きのうは、野党の多くが慎重審議を求める中、米国を除く 11 カ国による環太平洋経済連携協定（TPP11）の承認案を衆院で通過させた。熟議とは程遠いありさまだ。

国会が閉会すれば、9 月の自民党総裁選への準備が本格化する。首相は自らの 3 選につなげるためにも、重要法案を仕上げて、実績をアピールしたいのだろう。

だが、そんな首相の「自己都合」で、国民生活に広範な影響を及ぼす法案の審議を拙速に進めることは許されない。

与党内では、働き方改革法案の衆院厚生労働委員会での採決を、森友文書公表日の 23 日にぶつける案も検討されているという。メディアや国民の関心を分散させ、森友問題での政権へのダメージを少しでも和らげようという思惑だ。あまりにも姑息な考えに唖然とする。

「うみを出し切る」。首相は一連の不祥事いついて、国民にそう誓ったはずだ。真相解明が中途半端なまま国会の幕が下りれば、国民の政治不信は深まるばかりだろう。

強引な国会運営をしても、あと 1 カ月を乗り切れば何とかなる。首相がそう思っているのだとしたら大間違いだ。

（2018 年 5 月 22 日）